

生きている看板

小川未明

青空文庫

町まちから、村むらへつづいている往來おうらいの片側かたがわに、一軒けんの小さなペンキ屋やがありました。主しゅ人ゆじんというのは、三十二、三の男おとこであつたが、毎日まいにちにもせずに、ぶらぶらと日ひを送おくつていました。このあたりの商しょう店てんは、一度ど、かけた看かん板ばんは汚よごれて、よくわからなくなるまで、懸かけておくのが例れいであつて、めつたに、新あたらしくするということはなく、また、新あたらしい店みせが、そうたくさんできて、看かん板ばんを頼たのみにくるといふこともなかつたのです。「そんなことで、商しょう売ばいになりますかな。」といつて、ペンキ屋やのことを近きん所じよでうわさするものもありました。

それも、そのはずであつて、いくら、地方ちほうのちいきな町まちといつても、工こう場じやうでは、機き械かいが運うん転てんをして、人々ひとびとはせつせと働はたらいていたし、またほかの商しょう店てんでは、一せん銭せんと二せん銭せんと争あらそつて、生せい活かつのためには、血ちまなこ眼こになつていたからでした。

ペンキ屋やの主しゅ人じんの兵へい藏ざうは、ぶらぶらとして、自じ分ぶんの家うちの戸とく口ぐちを出でたり、はいつたりしていました。そして、ぼんやりとするときは、町まちの方ほうをながめ、あるときは、村むらの方ほうをながめて空くう想そうしてました。

彼かれが、どんなことを頭あたまの中なかに思おもつているか知しつた人ひとはありません。ただ、彼かれが、こうし

て、いるうちに、彼を除いて世の中は、せつせと駆け足をしていたのであります。

ある男は、一日のうちに、五円ばかりもうけました。ある男はこの一週間の間に、東京から、大阪の方までまわつてきました。また町へ、旅から役者がきて芝居を打つて去れば、その間には質屋の隠居が死に、指物屋の娘は嫁にいったのであります。けれど、ペンキ屋の主人の生活には、変わりがありませんでした。

「兵さん、このごろは、どうですか。」と、聞くものがあると、兵蔵は、にやりと笑つて、

「あいかわらず、暇です。」と答えました。

女房は、質屋へ持つてゆく品物もつきて、子供のものまで持つてゆきました。

「なにか、ほかの商売をすればいいのに、ああ遊んでいては、困るのもあたりまえだ……。」と、近所のものは、見るに見かねて、ささやき合つたのです。

しかし、兵蔵は、あいかわらず、のんきそうに暮らしてました。ある日のこと、女房は、辛棒がしきれなくなつたというふうで、「なにをそうぶらぶらして、毎日、考えているんですね。私たちは明日食べるお米がないじゃありませんか。」と、いいました。

「好きで遊んでるんじゃない。仕事がないのだから、しかたがない。」

彼は、こういつて、ぶらぶらしていました。そして、日に、幾度ということなく、戸口を出たり、はいったりしていました。

ある日のこと、町の菓子屋から使いがきて、店の看板を塗り換えるから、ひとつ趣向を凝らして、いいものを描いてくれと頼まれたのです。

その菓子屋というのは、町での老舗でありましたから、女房は喜んで、

「おまえさん、いいものを描いて、評判をとってくださいね。そうすれば、また、ほかの家でも頼みますから……。」と、いいました。

兵藏は、にやりと笑っただけで、答えませんでした。いよいよ町の菓子屋へ、仕事に出かけてゆくと、

「大将、きれいな女を描いてもらいたいと思うんだが、すてきな、美人を描いてくれないか。」と、菓子屋の番頭がいました。

「美人ですか？」と、兵藏は、問い返した。

「ああ、だれでも振り向いて見るようなのをな……。」と、番頭はいいました。

「文字も書くんでしょね。」

「ああ、字も書かなければ、看板にならないが、まあ、絵のほうに力をいれてもらいたいのだ。」

兵蔵は、しばらく、考えていましたが、黙つて、そのまま仕事にとりかかりました。家で、留守をしている女房は、せっかく、夫が仕事にありついたので、どうか、いいものを描いてきてくれればいい、それが人の目に止まって、評判になつたら、また、ほかから頼みにくるだろう、そうすれば、いままでのように困ることもないと、ひたすら、心で祈つていました。

また、近所のもものは、兵蔵が、仕事に出かけたのを見て、「珍しいことだ。」と、話をしていました。

兵蔵は、いつに変わらぬのんきな顔つきをして、しきりに筆を動かして、いま女の頭から描きはじめたところだ。町の問屋や、工場や、会社などでは、目まぐるしく、人たちが働いている間に彼は、鼻唄をうたいながら、さも楽しそうに、美人の姿を描いていました。

番頭は、二、三度、家の外に出て、兵蔵の描いている看板を仰ぎましたが、いつまでも立つて見ていずに、

「なるほどな。」と行って、じきに店の内へ引つ込んでしまいました。

その日の晩方には、美しい女の立ち姿がみごとに描き上がりました。兵蔵は、はしごから降りて、しばらく道の上に立つて、自分の描いた絵に見とれていました。

「ああ、よくできた。人好きのする顔だな。」と、いつしか、そばにきて立っていた番頭が、感心していったのであります。

兵蔵は、仕事を終わって、道具を片つけて帰かけた。そして店を出てから、もう一度自分の描いた看板を見返していたが、いつしか考え込んで、地面へ釘づけにされたように、じつとして動かなかつた。

彼は、なんと思つたものか、また、絵の具を出して、はしごへ上りました。そして、しばらく筆を使つていましたが、やつと、それで満足したように、絵をながめて、はしごを降りると自分の家の方へ帰ってゆきました。そのときは、もう、あたりが、暗くなつて、人の顔が、はつきりわからなかつたのでした。

翌日の朝、番頭は、外へ出て、ゆつくり看板を見ようとして仰ぐと、あつ！と声をたて、驚きました。彼は、あわてて家へはいると、

「おい、みんな出てみな！」と、小僧たちについて、騒ぎました。

それも、そのはずのこと、看板の美人の頭に、一本の小さな角が生えていたからです。
 「一晩の中に、角が、ひとりでに生えるわけではない。看板屋が、後から描いたに相違ないが、なぜこんなことをしたのだろう。」と、番頭はいつたのです。

「これから、看板屋へいつて、呼んできて、描きかえさせなければならん……。」と、番頭は怒りました。

このときまで番頭の後ろに立つて、ものをいわずに、看板を見ていた、菓子屋の主人は、

「いや、描きかえさせなくていい。なかなかおもしろいと思う。きつと、この看板は、世間の評判になるだろう。」と、いいました。

はたして、この看板は、世間のうわさに上った。

「あれは、鬼を描いたんでしよう。」

「いや、あんな、美しい鬼というものは、ありませんよ。やはり、美人を描いたので、顔は、こんなに美しくても、心は、鬼だということを現したものでしょう……。」

「しかし、なかなかあの角は、愛嬌がありますね。」

「そう、あんなに顔の、美しい鬼があれば悪くありませんな。」

人々は、看板の絵を、さながら生きている人間を批評するように、とりどりにうわさをしたのでした。

いつのまにか、菓子屋の看板の美人は、この町の人たちの仲間入りをして、りっぱな存在になったのであります。

村の人たちも、看板を目標に、道筋などを語るようになりました。しかし、これを描いた兵蔵は、それから転々して、どこへか移っていつてしまった。いつしか、兵蔵のことは忘れられて、だれもいわなくなつたけれど、彼の描いた、菓子屋の看板はその後長く、ものをいわない人間のごとく、生きていて、町の名物となつていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「早稲田文学」

1927（昭和2）年11月

※表題は底本では、「生《い》きている看板《かんばん》」となっています。

※底本にある語句の編集注は削除しました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生きている看板

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>